

日本ロレンス協会第47回大会プログラム

◎日時：2016年6月11日（土）、12日（日）

◎会場：松山大学樋又キャンパス2階H2A教室

住所：〒790-8578 愛媛県松山市文京町4番地2

連絡先：松山大学 新井英夫研究室

tel: 089-925-7111（大学代表） email: harai@cc.matsuyama-u.ac.jp

◎交通アクセス：伊予鉄道市内電車鉄砲町駅より徒歩5分

◎昼食のご案内：両日ともに樋又キャンパス1階レストランが営業しておりますので、ご利用ください。

◎宿泊のご案内：プログラムの最後に宿泊施設をリストにして掲載しましたので、ご参考にしてください。

【役員会】

日時：6月11日（土） 11:00～12:30

場所：松山大学文京キャンパス東本館7階会議室1

昼食を用意します。代金は当日お支払いください。

第1日目：6月11日（土曜日）

受付：13時より

総合司会：岡山 勇一（松山大学名誉教授）

◎開会の辞：会長 新井 英永（熊本大学教授）（13:30）

◎開催校挨拶：瀧 由紀子（松山大学大学院言語コミュニケーション研究科長）（13:35）

研究発表

司会 星 久美子（信州大学特任准教授）

◎1. 13:40-14:15

The Plumed Serpent——ケイトの攻撃性から見る愛と承認欲求のプロット

大山 美代（広島大学大学院博士課程後期）

◎2. 14:15-14:50

「知のステータス変化」——D. H. Lawrence と Iris Murdoch 作品における言語機能の比較

角谷 由美子（神戸女学院大学非常勤講師）

*休憩 14:50-15:00

シンポジウム

◎マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル 15:00-17:30

司会 木下 誠 (成城大学准教授)

ロレンスと社会信用論(Social Credit)——キボ・キフト、ダラムの炭鉱労働者たち、詩集『三色すみれ』

講師 木下 誠(成城大学准教授)

ゴードン・コムストックの金銭感覚

——George Orwell, *Keep the Aspidistra Flying*(1936)における拝金主義批判

講師 福西 由実子 (中央大学准教授)

ポール・モレルの「レッサー・アーツ」——ウィリアム・モリスからD・H・ロレンスへ

講師 川端 康雄 (日本女子大学教授)

◎総会 17:40—18:20

◎懇親会 18:30—20:30

場所：松山大学樋又キャンパス 1階 レストラン「ル・ルパ Le repas」

会費：¥5,000 (大会当日受付でお支払いください)

第2日目:6月12日(日曜日)

ワークショップ

◎ロレンスと短編——短編というテキスト空間における他者表象 9:30-12:00

司会 岩井 学(熊本保健科学大学准教授)

作家ロレンスと短編小説

講師 中林 正身(相模女子大学教授)

「眠り姫」物語の系譜における「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」をめぐって

講師 横山 三鶴(甲南大学非常勤講師)

「馬に乗って去った女」「島を愛した男」「死んだ男」における固有名の喪失と他者の歓待

講師 井出 達郎(東北学院大学准教授)

◎閉会の辞：副会長 浅井 雅志 (京都橘大学教授)

研究発表

The Plumed Serpent——ケイトの攻撃性から見る愛と承認欲求のプロット

大山 美代 (広島大学大学院博士課程後期)

*The Plumed Serpent*における主人公ケイトの情動論的分析は、これまで彼女を脅威や変化にさらされる受動的な立場としてとらえるだけにとどまってきた。本発表では、ケイトの中に目覚めていく攻撃性について考察する——それは他者に対してのみならず、西洋的な自我を持ち続けるべきか、メキシコ的な女になるべきかという激しい葛藤や苦悩として、自分自身に対しても向けられる。攻撃の欲動の源泉には、ケイトのラモンに対する愛と、それが叶わなかったことへの挫折があると考えられ、その愛によって彼女はいつそう強く西洋的な自我に縛られていると言える。このように、メロドラマティックな人間模様や愛憎劇のプロットを焦点化することによって、これまで軽視されてきた、*TPS*の小説としての価値を見出すことが本発表のねらいである。物語の終わりに至るまで、攻撃性という人間の本能的な自己主張によって愛と承認を求め続けるケイトの自我の強さを論じることで、登場人物が生命感を欠き、ロレンスの思想の代弁者となっているという作品への批判に対する反論としたい。

「知のステータス変化」——D. H. Lawrence と Iris Murdoch 作品における言語機能の比較

角谷 由美子 (神戸女学院大学非常勤講師)

ポスト構造主義の代表的なフランスの哲学者 Jean-François Lyotard は Ludwig Wittgenstein の言語ゲーム理論を適用しつつ、著書『ポストモダンの条件』(1979)において「1950年代終わりのポストモダン時代に入ると同時に知のステータスにも変化が生じる」と主張している。本発表では、リオタールの言わんとする「知のステータス変化」がいかんにして起こり、どのような形で文学に影響を与えたのかを、1950年代以前の文学テキストとして D. H. Lawrence を、以降をウィトゲンシュタインとロレンス両者に肯定的な理解を示している Iris Murdoch を取り上げ、両者の作品を比較、分析しながら考察する。

テキストはマードックの *Severed Head* (1961) と、ロレンスの *The Rainbow* (1915) と *Lady Chatterley's Lover* (1928) を精査。どれも性を大胆に扱ったセンセーショナルな作品であるが、当時の両作家に対する受容は大きく異なる。生前にその業績を十分に評価されたマードックに対し、ロレンスは度重なる検閲や発禁処分に苦しめられた。それぞれの作品の出版や上演の歴史、および作中の言葉の機能を分析することにより、20世紀中頃に生じたとされる「知のステータス変化」とは言語機能を日常化させる作業を意味するものであり、その機能の違いこそが両作家の名声の明暗を分けた要因であったと結論付けたい。

シンポジウム

マモン神に抗って——モリス、ロレンス、オーウェル

司会 木下 誠 (成城大学准教授)

『チャタレー夫人の恋人』の最後、メラーズはコニーに宛てて次のように書いている——“I feel the devil in the air, and he'll try to get us. Or not the devil – Mammon: which I think, after all, is only the mass-will of people, wanting money and hating life.” 武藤浩史氏が「拝金主義という名の悪魔」と訳したこの「マモン神」に抗うこと、それはD・H・ロレンスが繰り返し著作のなかで主張し、(おそらく)実人生において貫いてきた姿勢であろう。そのようなロレンスの社会批判の姿勢における「美」の重要性、そしてヴィクトリア時代の芸術家や思想家たちから受けた影響をあらためて考えるとき、ウィリアム・モリスの存在が浮かび上がる。モダニズム期以降の作家たちの新しさにもつばら注目すると、モリスの影響力は見えにくくなってしまふかもしれないが、しかしそれは確実に、ロレンスさらにはジョージ・オーウェルへと受け継がれている。このシンポジウムは、20世紀前半までの芸術創造と産業主義批判におけるウィリアム・モリスの系譜を跡づける試みである。

外部講師として、ジョン・ラスキンやウィリアム・モリス、ジョージ・オーウェルなどについて多くの論考を發表されている日本女子大学教授の川端康雄氏をお迎えした。まずは川端講師にシンポジウム全体の見取り図として、ラスキンやモリスからアーツ・アンド・クラフツ運動を経てロレンスそしてオーウェルへといたる系譜を概説していただく。つづいて木下が1928年前後のロレンスが示した「キボ・キフト」運動と炭鉱労働者たちへの共感をめぐって、また福西由実子講師がオーウェル『葉蘭をそよがせよ』(1936年)における拝金主義批判と同時代の趣味(テイスト)や文学・社会運動との関係について發表する。最後にふたたび川端講師に登壇いただき、モリスの芸術論や社会主義思想が『息子と恋人』や『虹』などにみられる装飾芸術(レッサー・アート)への関心を通してどのように流れ込んでいるのかを語っていただく。

ロレンスと社会信用論 (Social Credit)

——キボ・キフト、ダラムの炭鉱労働者たち、詩集『三色すみれ』

講師 木下 誠 (成城大学准教授)

ロレンスはロルフ・ガーディナーへ宛てた1928年1月16日付けの手紙で、彼に勧められて読んだジョン・ハーグレイヴ『キボ・キフトの告白』(1927年)の感想を伝えている。ハーグレイヴはウィリアム・モリスの強い影響を受けて野外活動や手工芸を重視した社会運動「キボ・キフト同胞団」の創始者であった。「キボ・キフト」は風変わりな自然回帰集団にとどまらず、「個人の経済的安定」というスローガンを掲げて活動していた。ハーグレイヴはその実現のために、第一次大戦後にC・H・ダグラスが金融資本主義への対抗として提唱した経済理論「社会信用論」をよりどころとした。『チャタレー夫人の恋人』でメラーズがキボ・キフト風の赤いズボンに言及していることに着目して優生学との関連を論じた優れた研究がすでにあるが、ロレンスは『キボ・キフトの告白』の読後に、近年のベイシック・インカムをめぐる議論につながる社会信用論にも一定の理解を示していた。

ほぼ同時期にロレンスは、ダラム在住のチャールズ・ウィルソンという人物から、ゼネスト後の困窮した炭鉱地帯を訪れて労働者教育協会の支部で講演をしてほしい、と依頼されていた。その企画は実現しなかったが、1929年初頭まで続いた手紙のやりとりのなかで、ウィルソンの求めに応じて支援メッセージを送っている。そのメッセージには、詩集『三色すみれ』(1929年)に掲載されることになる詩の断片が含まれていた。

本発表では以上のような手紙を中心に提起し、ゼネスト後の炭鉱労働者たちに示したロレンスの共感および資本主義への批判を考察するために、モリスのキボ・キフト運動については自然回帰や優生学的「再生」よりも、その反拝金主義的「革命」の可能性に注目する。

ゴードン・コムストックの金銭感覚

—George Orwell, *Keep the Aspidistra Flying* (1936)における拝金主義批判

講師 福西 由実子 (中央大学准教授)

ジョージ・オーウェルの3作目の長編小説である *Keep the Aspidistra Flying* は、オーウェル自身が1934年10月から36年1月までロンドンのとある書店で店員として働いた経験から生まれた作品である。主人公のゴードン・コムストックはある意味オーウェルの分身といえるが、没落したミドルミドルクラス出身で、詩作に没入し階級の底辺を経験するために、収入の安定した広告会社を辞め、ロンドン場末の貸本屋の店員となる。やがて生活に困窮し詩作は滞り、ゴードンの独白は、金銭にまつわる文言で埋めつくされていく。

恋人の妊娠を機に、ゴードンはこれまで書き溜めた詩の習作の束を下水溝に棄て、決別したはずの広告業界へと戻っていく。小説の結末で彼が新居の窓辺に飾ろうと恋人に提案するのが、ロウワーミドルクラスの象徴ともいえるべき「葉蘭」である。

本報告では、作品中に散りばめられた収支の記録や拝金主義批判に注目し、これをゴードンの勤務する貸本屋に出入りする様々な階層の客や、店の書架に並ぶロレンスの詩集をはじめとする実に雑多な書籍、作品のモチーフとして繰り返し描写される葉蘭に読み取れる同時代の趣味(テイスト)の問題と関連付けながら、オーウェルがなぜゴードンに、最終的に「金の世界」への回帰——すなわち、詩的ヴィジョンとマスメディア広告との間で折り合いをつけること——を選択させたのか、その生産的な意味を探ってみたい。また、マス・オブザーヴェイション運動の創始者チャールズ・マジの詩作運動や、ウィリアム・エンプソンのパストラルの概念との関連性についても言及したい。

ポール・モレルの「レッサー・アーツ」

—ウィリアム・モリスからD・H・ロレンスへ

講師 川端 康雄 (日本女子大学教授)

ロレンスは晩年のエッセイ「ノッティンガムと炭坑のある田園地帯」(1930年)のなかで、「19世紀に人間の精神を裏切ったのは醜悪さであった」と断言している。ヴィクトリア朝に富裕層と産業推進者が犯した大罪とはなにか。それは労働者たちを貶めて「醜悪な環境、醜悪な理想、醜悪な宗教、醜悪な希望、醜悪な愛、醜悪な衣服、醜悪な家具、醜悪な家、醜悪な労使関係」へと追いやったことだった。「人間の魂はパンよりももっと現実の美を必要としている」というのに。

これはウィリアム・モリス（1834-96年）を長年読んできた者にとっては、芸術創造の観点から産業主義を批判したモリスの社会思想がロレンスに直に流れ込んでいることを証す発言であるように思える。「衣服」、「家具」、「家」への言及はモリスの言う「レッサー・アーツ」すなわち装飾芸術であり、ロレンスはこれらを人間の魂に必要な「現実の美」（actual beauty）の重要な部分に含めている。

ロレンスの小説作品のなかにも装飾芸術への関心が見られる。『息子と恋人』でポール・モレルは事務職のかたわら絵画修行に加えデザイン制作に励み、リバティ商会に自作のテキスタイル・デザインを供給する。絵付も学ぶ。青年期のポールの苦闘のなかでこの活動はどのように位置づけられるのだろうか。あるいは『虹』における教会建築や工芸の話題（ジョン・ラスキンが言及される）は、小説世界といかなる有機的な関係をもつのだろうか。

モリスの芸術論および社会主義思想は、先人のカーライルやラスキンの思想とともに、20世紀に入って（特に第一次大戦以後）モダニズムの興隆を契機に忘却されたとする見方が少し前まで支配的だったが、それはいま修正されつつある。本発表では、ラスキン、モリス、アーツ・アンド・クラフツ運動からロレンスまで、いかなる系譜が考えられるのか、そしてその系譜にいかなる意義を見出せるのかを、ロレンスの小説やエッセイをとおして考えてみたい。

ワークショップ

ロレンスと短編——短編というテキスト空間における他者表象

司会 岩井 学 (熊本保健科学大学准教授)

D・H・ロレンスの作品と聞くと、多くの方は『息子と恋人』、『虹』、『恋する女たち』あるいは『チャタレー夫人の恋人』といった長編を真っ先に頭に思い浮かべるのではないだろうか。しかしロレンスは、未完を含めると80近くの短編を著し、短編作家としての力量も評価されていたことを忘れてはならない。イギリスで編纂される短編集には必ずと言って良いほどロレンスの作品が採り上げられるし、また日本でもロレンスの短編集の複数の邦訳が入手可能である（新しいものでは武藤浩史訳、『D.H.ロレンス幻視譚集』、平凡社）。

近刊の『ロレンスの短編を読む』（松柏社）において浅井雅志氏は、「長編では生の主要問題を対話的手法を用いて……掘り下げていくが、短編では……さまざまな状況のもとでの人間のありようをスナップショットのごとく切り取り、その多様性を示す」ため、「彼の最大の特徴であり武器でもある」彼独特の文体や「自己思想の深化」が十分発揮できないのではないかという疑問を呈している。本ワークショップでは、この問題提起を足がかりに、そして他者表象をキーワードにしながら、中林正身氏が伝記的事実を援用しつつ短編の特質や長編との関連を探り、横山三鶴氏は短編における「眠り姫」の物語の系譜をたどる。そして井出達郎氏が短編の寓話的手法について他者の歓待というテーマからのアプローチを試みる。これらの発表及びフロアとのディスカッションを通して、短編作家としてのロレンス像や、短編というテキストの新たな可能性について探ってみたい。

作家ロレンスと短編小説

講師 中林 正身 (相模女子大学教授)

「ロレンスの短編を読む」というこの機会に、「ロレンスが短編小説を書いた」という事実について考えたい。ロレンス文学に興味をもつ研究者の多くがその短編小説の数の多さを目の当たりにして一度は疑問に思い、それでもあれだけのボリュームがあって難解で骨の折れる（だからこそやりがいのある）個々の長編小説の研究に没頭しているうちにいつしか忘れてしまったことではないだろうか。だからまず、あれほどの多くの短編をロレンスが書いたその理由を生産してみたい。この際に、神秘家になったり声高に説教したりして読者を無理に謹聴させるような長編小説と、そのような感情の氾濫が抑制される短編小説との共通性または近接性にも注目する。本来ならばロレンスの執筆活動を鳥瞰して時系列に沿って包括的に論じるべきテーマだが、今回は特徴的な事柄や時期を限定して扱う。主に扱う時期としては『チャタレー夫人の恋人』の3つのバージョンが書かれた1926年後半から1928年前半としたい。

そして、この時期に執筆された作品群を「他者表象」というキーワードの篩にかけた場合にはどの作品がどのような含蓄や暗示をもって残るのかを見つけてみたい。

「眠り姫」物語の系譜における「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」をめぐって

講師 横山 三鶴 (甲南大学非常勤講師)

ロレンスの短編小説の中には、一連の「眠り姫」的テーマを持つ小説群が存在し、それぞれ同時期に執筆された長編小説と連動しあっていると思われる。

たとえば、「馬仲買の娘」は、死と再生をテーマにした物語として、同時期に執筆された『恋する女たち』と同様、戦時という危機的状況において現代人がいかに創造的な生を取り戻せるのかという問題を、可能な限り純化したかたちで描いたものとして読むことができる。一方で、「眠り姫」物語的な象徴性とおとぎ話的展開を特徴とするこの作品は、一連の娘物語の一つとしてみると、『ロストガール』とも連動し、ロレンスが他者との関係性を描く上での転機となる作品として位置付けることもできる。家という閉塞的な空間に閉じ込められている娘をある種の「眠り」の状態に陥らせ、他者による「目覚め」へと導くプロットの展開は、3年後に執筆された「ヘイドリアン」にも共通する。これらの作品においては、ことばより視線、からだとからだの接触といった感覚的要素が鍵を握っているという事は言うまでもない。母親の存在が欠落しているという事実も見逃せない。そして、娘たちに必ず訪れる奇跡的な瞬間。この展開は作品にどのような効果をもたらすのか。

今回の発表では、『恋する女たち』と『ロストガール』の眠らない娘たちと、「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」の娘たちを比較しながら、ロレンス流「眠り姫」物語の系譜の中でこれらの中期の作品がどのように位置づけられるか、そして、ロレンスがなぜ短編小説の中で繰り返しこのモチーフを採用したのかが解明できればと考えている。

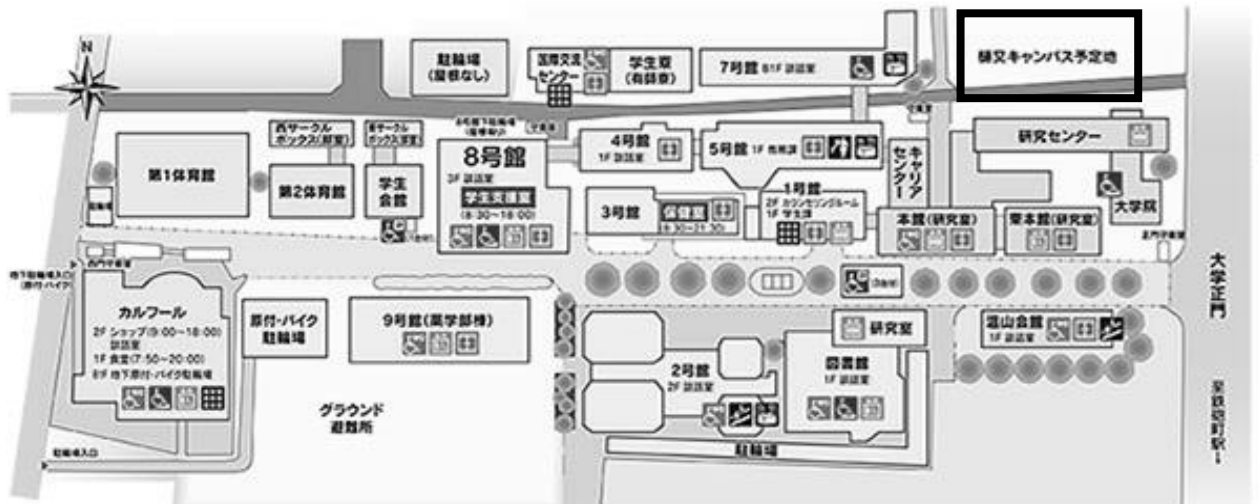
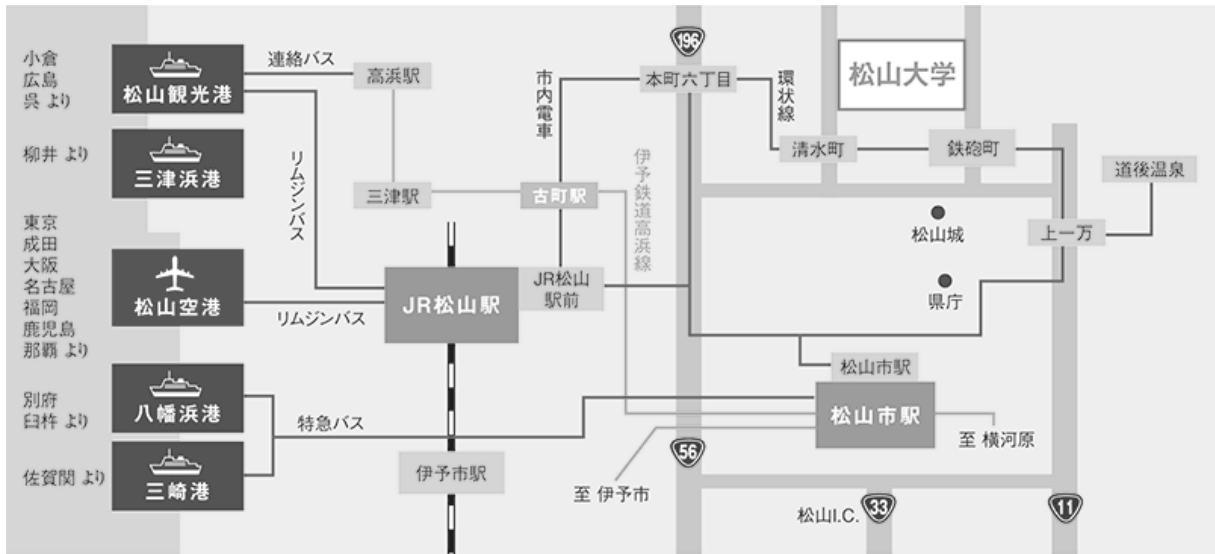
「馬に乗って去った女」「島を愛した男」「死んだ男」における固有名の喪失と他者の歓待

講師 井出 達郎 (東北学院大学准教授)

標題に挙げたロレンス後期の三つの短編は、“The Man/Woman Who …”という構文を用いたタイトルのもと、共通して固有名の喪失というべき事態を描いている。一見するとその事態は、自らが所属していた言語の共同体の外へとはじき出されるという、きわめて否定的な状態を表しているように見える。だが三つの短編に特異なのは、その否定的に見える固有名の喪失という事態が、他者から名づけられる者へと変わることで、すなわち、他者を迎え入れる歓待という別の出来事としても読めるという点にある。

本発表は、三つの短編から固有名の喪失を共通したモチーフとして拾い上げ、それを他者の歓待という主題から読み、その読みの可能性を探ろうとするものである。もともとロレンスは、自身の言葉でいう「移動への絶対的希求」によって、自らが移動して他者に会いに行くという出来事を繰り返し描いてきたと言えるだろう。しかし、旅行記や長編作品において、その「長さ」に伴う大きな時空間の移動を通して出会う他者は、単にロレンス自身の理想をロマンティックに投影したものでしかないのではないかと批判される面があった。それに対して三つの短編が描くのは、短編の「短さ」が要請する小さな時空間において、移動の断絶や待つといった行為を通じた、他者との別の出会い方にかたならない。確固たる名前をもった自己が移動して他者に会いに行くのではなく、名前を失った自己がどこまでも他者を受け入れること、この固有名の喪失と他者の歓待という問題に、ロレンスにとって短編というジャンルがもつ意味を読み込んでみたい。

キャンパスマップ



※樋又キャンパスは新校舎のため、地図では「樋又キャンパス予定地」と表記しております。

大会会場周辺ホテル情報

《市内中心部》

- カンデオホテルズ松山大街道：松山市大街道 2-5-12
伊予鉄道市内電車「大街道」駅より徒歩 1 分：☎089-913-8866
- 東横イン松山一番町：松山市一番町 1-10-8
伊予鉄道市内電車「大街道」駅より徒歩 5 分：☎089-941-1045
- 東京第一ホテル松山：松山市南堀端町 6-16
伊予鉄道市内電車「南堀端」駅より徒歩 1 分：☎089-947-4411
- 松山東急 REI ホテル：松山市一番町 3 丁目 3-1
伊予鉄道市内電車「大街道」駅より徒歩 1 分：☎089-941-0109
- 松山全日空ホテル：松山市一番町 3 丁目 2-1
伊予鉄道市内電車「大街道」駅より徒歩 1 分：☎089-933-5511
- 国際ホテル松山：松山市一番町 1 丁目 13
伊予鉄道市内電車「大街道」駅より徒歩 3 分：☎089-932-5111
- ダイワロイネットホテル松山：松山市大街道一番町 2-6-5
伊予鉄道市内電車「大街道」駅より徒歩 2 分：☎089-913-1355
- ホテル JAL シティ松山：松山市大手町 1-10-10
伊予鉄道市内電車「西堀端」駅より徒歩 1 分：☎089-913-2580

《道後地区》

- オールドイングランド道後山の手ホテル：松山市道後鷺谷町 1-13
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 5 分：☎089-998-2111
- 宝荘ホテル：松山市道後鷺谷町 2-20
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 5 分：☎089-931-7111
- 道後温泉ホテル椿館：松山市道後鷺谷町 5-32
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 5 分：☎089-945-1000
- ふなや：松山市道後湯之町 1-33
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 4 分：☎089-947-0278
- ホテル古湧園：松山市道後鷺谷町 1-1
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 4 分：☎089-945-5911

- 道後館 : 松山市道後多幸町 7-26
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 5 分 : ☎089-941-7777
- 茶玻璃 : 松山市道後湯月町 4-4
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 4 分 : ☎089-945-1321
- 大和屋本店 : 松山市道後湯之町 20-8
伊予鉄道市内電車「道後温泉前」駅より徒歩 4 分 : ☎089-935-8880

*****Memo*****